No.11　　２０１６．２．１５／発行人：大庭　康二

# ◆ニュースレターおおば◆

平成２８年２月号

## テーマ『ワイン、自然農法、ワイン学』

○…今月はワインがらみの話題で。最初の一冊は「ブルース、日本でワインをつくる」。著者ブルース・ガットラヴ。聞き書き・木村博江。新潮社刊。ブルースさん(勝手にさん付けさせて頂く。勿論、面識もないが、読んでみて人柄がさん付けさせて頂いていい人だと思う)はニューヨーク生まれ。カリフォルニア大学デイヴィス校醸造学科を卒業。名だたるワイナリー数カ所でワイン造りを学んだ後、足利市にある知的障害者施設こころみ学園を母体とするココ・ファーム・ワイナリーでワイン造りに携わってきた。グレートワインに求められる大切な要素の一つは、テロワール、畑の風土を反映し、ワインの中に、そのヴィンヤード(ぶどう畑)の味が感じられること、とする考えのもとに様々な試行錯誤を繰り返しながら高評価のワインを生み出し、日本のワインを世界的水準に引き上げたと言われている。同時にブルースさんの影響を受けた造り手が、今やそれぞれの地で高品質のワインを生み出していることも注目される。そのブルースさん、２００９年に空知管内岩見沢市栗沢に１０R(トアール)ワイナリーを立ち上げ、ぶどうを育てワインを生み出している。すぐれたぶどうが採れて、自分が望むようなワインがつくれる場所ならフランスでもイタリアでもニュージーランドでもどこでも良いと考えていたブルースさんが、これから成長する娘さんのことを考えて北海道に住んでくれたのは、道産子の私としては嬉しい話だ。そして自分のワイン造りだけでなく、自分のワインをつくりたいと考えている道内各地の農家にぶどうを持って来てもらい、一緒にワインを仕込んで、でき上がったワインをその農家に売り戻す、受託醸造も行っている。「農家の人達が何年かトアールに通ってきて一緒に作業するうちにノウハウを身につけ、いつか独自にワイナリーを始め、互いに競争力をつけられたらとてもうれしい」との言葉どおりに、農家と一緒に作業する姿をテレビで見たが、どんなワインが生まれてくるか、すごく楽しみだ。

○…二冊目はそのブルースさんが、感動的な人、という福岡正信著「自然農法わら一本の革命」春秋社刊。耕さず、草もとらず、肥料もやらず、無の哲学と実践で「現代の老子」と呼ばれた福岡氏。１９８３年の初版。２００８年逝去。私が読んだのは２０１４年７月発行の新版２２刷。正に農業の本と言うより哲学の書だ。自分が農業をはじめたのは「良い人間になるため」だと言う福岡氏の言葉に賛同してブルースさんは「私は良い人間になるためという以上に、より人間らしく生きるために、農業が自分にとって大切だと考えています」と言う。ワイン造りの科学

的な面を理解し、その結果も手に入れた。古典的なワイン造りと、その結果も手に入れた。でも、その二つの側面が、自分の中でぴたりとかみあわなかった。でも福岡さんの本を読んで、すべてのピースが噛み合うようになった。少なくても自分自身は、すべてがどうあるべきか理解できたように思う、とブルースさんは言う。不勉強で知らなかったが、第四章緑の哲学・科学文明への挑戦、第五章病める現代人の食・自然食の原点、など現時点でも学ぶべき指摘に満ちている。

○…三冊目は、知のトレッキング叢書、として集英社インターナショナルが発行した「新・ワイン学入門」。早稲田大学教育学部複合文化学科教授、福田育弘著。ワイン関係の本ではソムリエとか輸入業者とか業界関係者の著作が多いので珍しく、一応、出身学部の先生が書いたのなら、と敬意を表して手にしたのだが、これが面白い。フランス政府給費留学生として３年間パリに滞在したのをキッカケにワインへの造詣を深めた。飲食の社会学、という独自の視点から、ソムリエ教本には出て来ない切り口が新鮮だ。偉大なワインの産地は、むしろ自然条件に恵まれない土地である、との指摘は、従来、日本はワイン造りに適さないと言われていた中で努力を重ねてきた日本ワインのパイオニアと、今も日本各地でそのテロワールを表現するワイン造りに挑戦するワイン生産者を元気づける。私が「ホテル清さと」に勤務していた時、お泊まりいただいた前ソルボンヌ大学学長ロベール・ピット氏も文中に登場し、懐かしく読んだ。食文化の変遷の中でのワイン、みんなと楽しみを分かち合いたい。

○…正月に読もうと借りてきた「回想の人類学」。晶文社刊。聞き手・川村伸秀。どうにか読み終えた。著者は我が故郷・美幌町が生んだ国際的な知識人、山口昌男氏。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授、同所長、札幌大学学長等を歴任。文化人類学をベースに、国内外の思想界に衝撃を与え、その広い学識は文学、芸術等の分野にも影響を及ぼし、２０１３年３月に逝去された。東京美幌会、札幌美幌会とか札幌大学学長時代とか何度かお目にかかった。高名な学者ながらニコニコと人懐っこい笑顔で接していただいた。美幌からも世界に誇れる人材を輩出したことを伝えたいし、子供達の励みになってほしいものだ。